

(3) 利用ゾーニングの作成

1) 総合評価図の作成

「自然環境保全の重要性」「利用の利便性提供」の2つの観点からの評価結果を下表のように組み合わせてAAからCCまでの9つに区分し、メッシュの分布状況を次図に示した。

表 3-36 : 2つの観点からの総合評価 (9区分)

		利用の利便性提供			
		高←←←		→→→低	
		A : 利用の利便性提供は最も高い(難易度が低く利用しやすい、利便性が高い)	B : 利用の利便性提供は高い(難易度が中程度で比較的利用しやすい、利便性・快適性は高め)	C : 利用の利便性提供は低い(難易度が高く利用が困難、利便性・快適性は評価しない)	
自然環境保全の重要性	高	A : 自然環境保全の優先度が最も高い(希少性・多様性が高い、もしくは脆弱性が高い)	AA	AB	AC
	↑	B : 自然環境保全の優先度は高い(希少性・多様性が高いが、脆弱性は低い)	BA	BB	BC
	↑	C : 自然環境保全の優先度は低い(希少性・多様性・脆弱性のいずれも低い)	CA	CB	CC
	↓				
	↓				
	低				

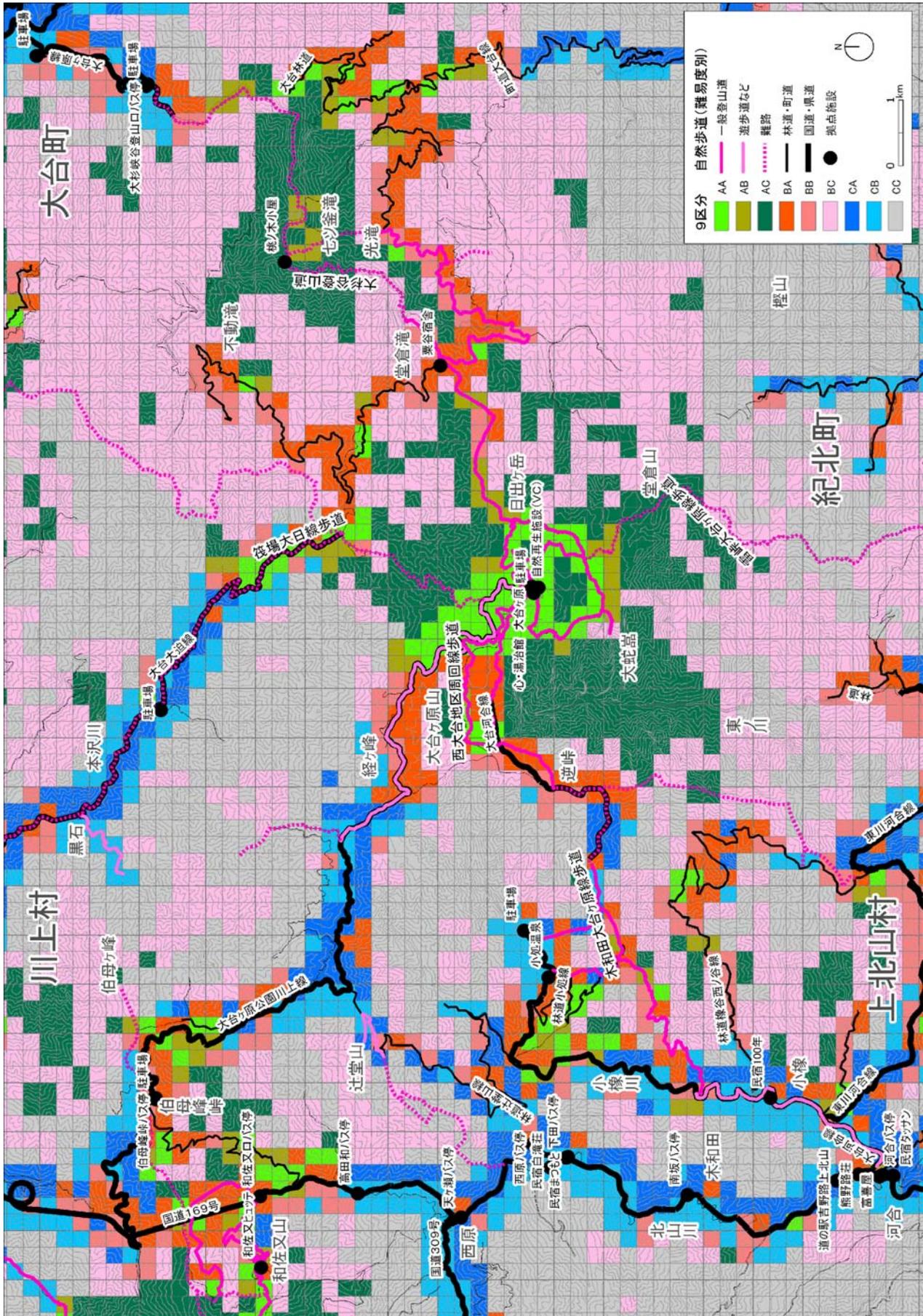


図 3-31 : 総合評価による9区分図

2) 総合評価図に基づく利用ゾーニング

メッシュ単位で9区分された総合評価図をベースとして、利用形態や主要ルート等の利用現況、地域資源分布等の「利用の視点」、周辺集落や拠点となる施設の分布等「地域活性化の視点」や、現在の施設等の「管理状況」、集水域や植生等「自然環境条件」の4つの要素を勘案しながら、各区分を代表する「重要地域」を抽出した。なお利用形態については、平成23年度総合的山岳環境保全対策推進事業実施業務で示された利用形態の分類を参考としつつ、「挑戦型利用」、「登山利用」、「トレッキング利用」の3つに区分した。

表 3-37：利用形態の分類

区分	定義
挑戦型利用	野営を伴う縦走登山や溪流遡行が目的。十分な装備で入山し、自己の能力（技術、体力、判断能力）の下で自然と直接触れ合うことを望み、行為に伴う危険性を了解し、自己責任を自覚。
登山利用	日帰りや宿泊を伴う登山利用が目的で、登山用の装備と「挑戦型利用」に準じる意識で入山。
トレッキング利用	日帰りのトレッキング、ハイキングを目的。簡易な登山装備で入山。 ※さらに「散策・風景探勝利用（短時間の散策が目的。日常と変わらない装備で入山。高齢者、児童、障害者も含まれ、団体行動の可能性もある）」の区分が想定されるが、本地域では山上駐車場や苔探勝路等に限られるため、トレッキング利用に含めた。

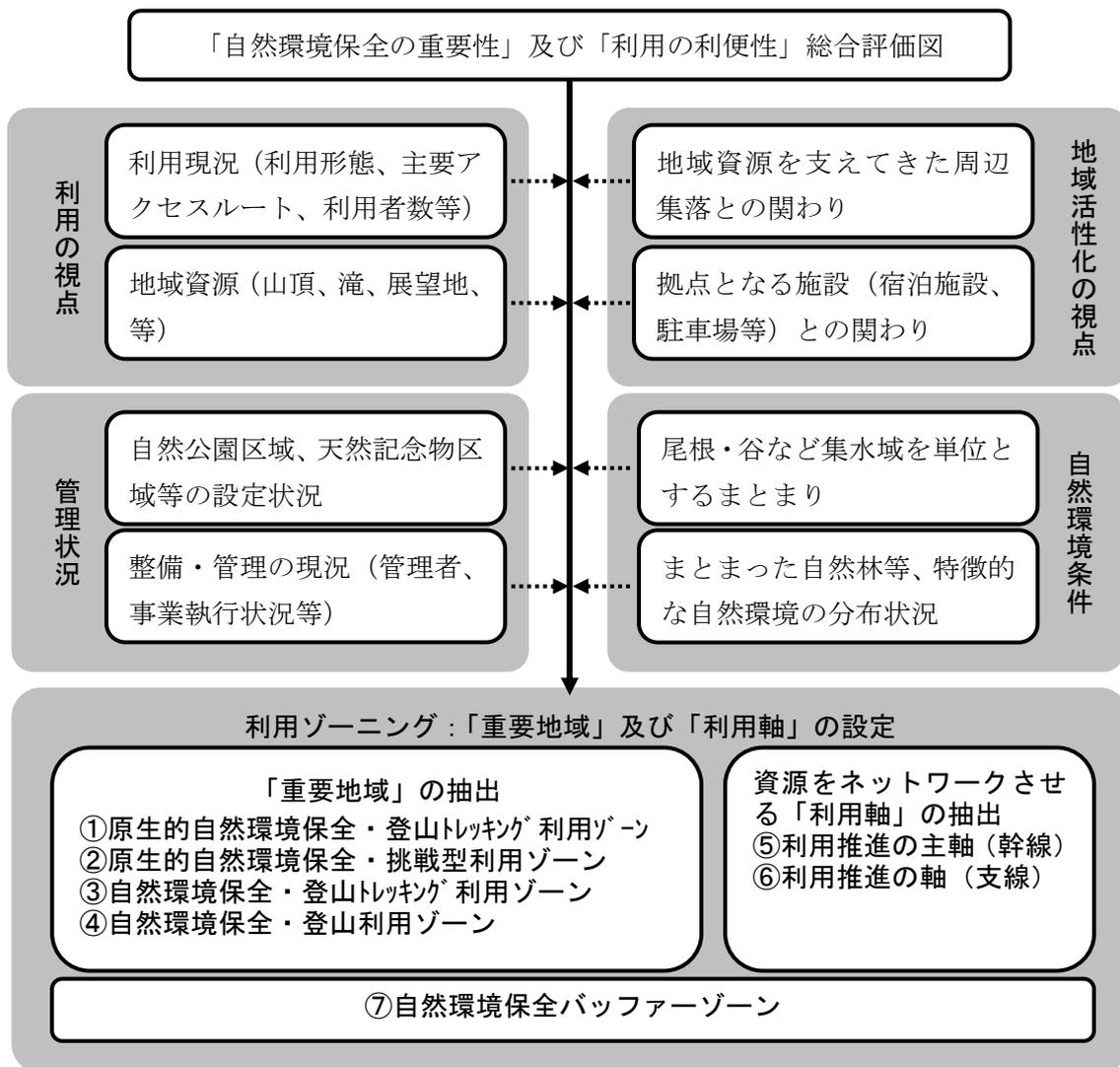


図 3-32：利用ゾーニング設定の流れ

ABは有意なまとまりが見られなかったため、他の区分に関連づけて整理した。BC及びCCは、重要地域の緩衝地域としての役割を担う「自然環境保全バッファゾーン」としてまとめて定義した。またCA及びCBは、主要なアクセスルート上に抽出されたため、資源をネットワークさせ「重要地域」の利用を促進するために今後強化していくべき「利用軸」と位置づけ、道路から250m圏内を基本としてゾーニングを行った。

以上のように「重要地域」4区分、「利用軸」2区分、「バッファゾーン」1区分の計7区分に整理した。

表 3-38：総合評価に基づく評価区分（7区分）

		利用の利便性提供			
		高←←←		→→→低	
		A：利用の利便性提供は最も高い（難易度が低く利用しやすい、利便性が高い）	B：利用の利便性提供は高い（難易度が中程度で比較的利用しやすい、利便性・快適性は高め）	C：利用の利便性提供は低い（難易度が高く利用が困難、利便性・快適性は評価しない）	
自然環境保全の重要性	高	A：自然環境保全の優先度が最も高い（希少性・多様性が高い、もしくは脆弱性が高い）	①原始的な自然環境保全・登山トレッキング利用ゾーン		②原始的な自然環境保全・挑戦型利用ゾーン
	↑	B：自然環境保全の優先度は高い（希少性・多様性が高いが、脆弱性は低い）	③自然環境保全・登山トレッキング利用ゾーン	④自然環境保全・登山利用ゾーン	⑦自然環境保全バッファゾーン
	↓	C：自然環境保全の優先度は低い（希少性・多様性・脆弱性のいずれも低い）	⑤利用推進の主軸（幹線）	⑥利用推進の軸（支線）	
低					

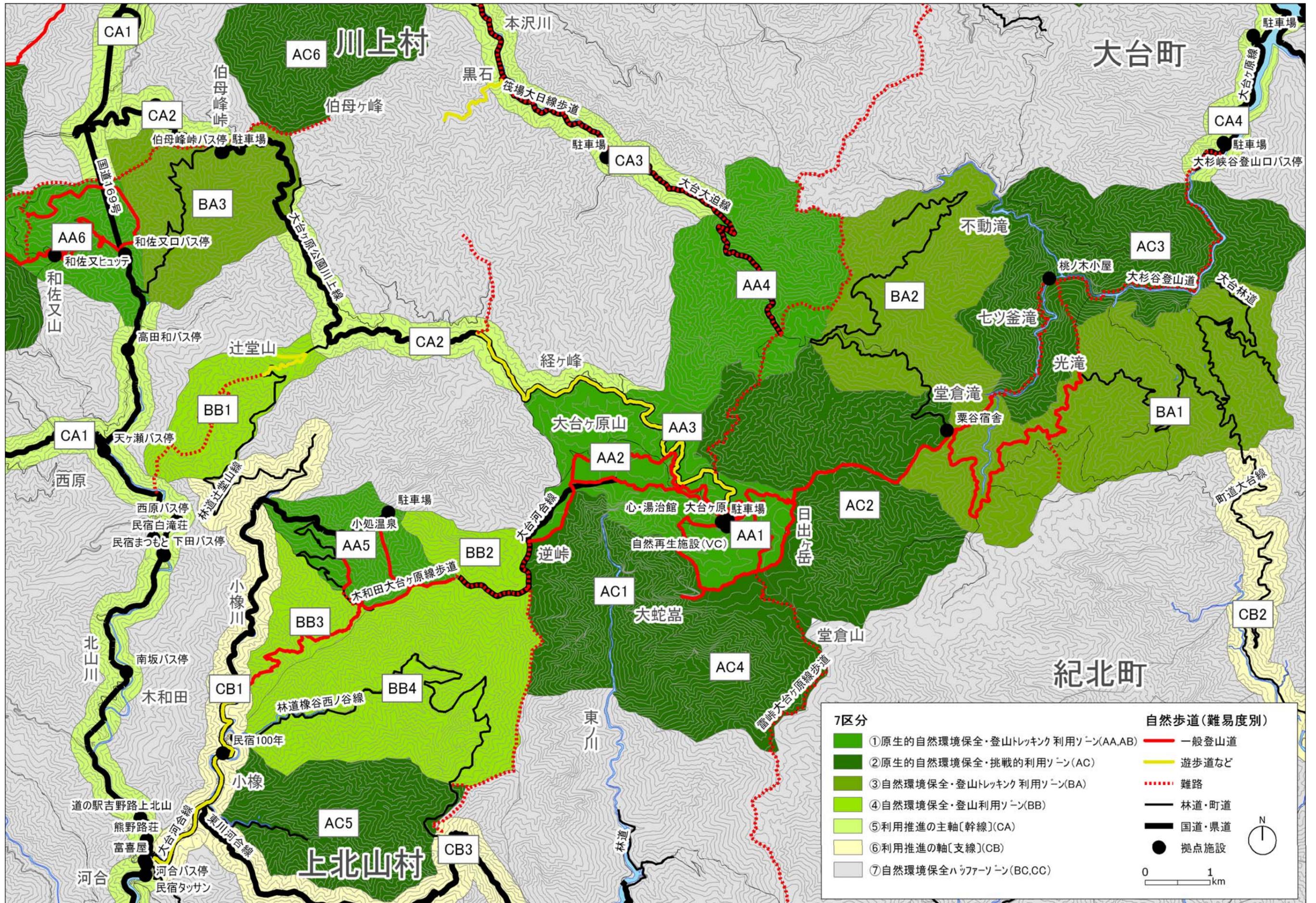


図 3-33 : 利用ゾーニング (案)

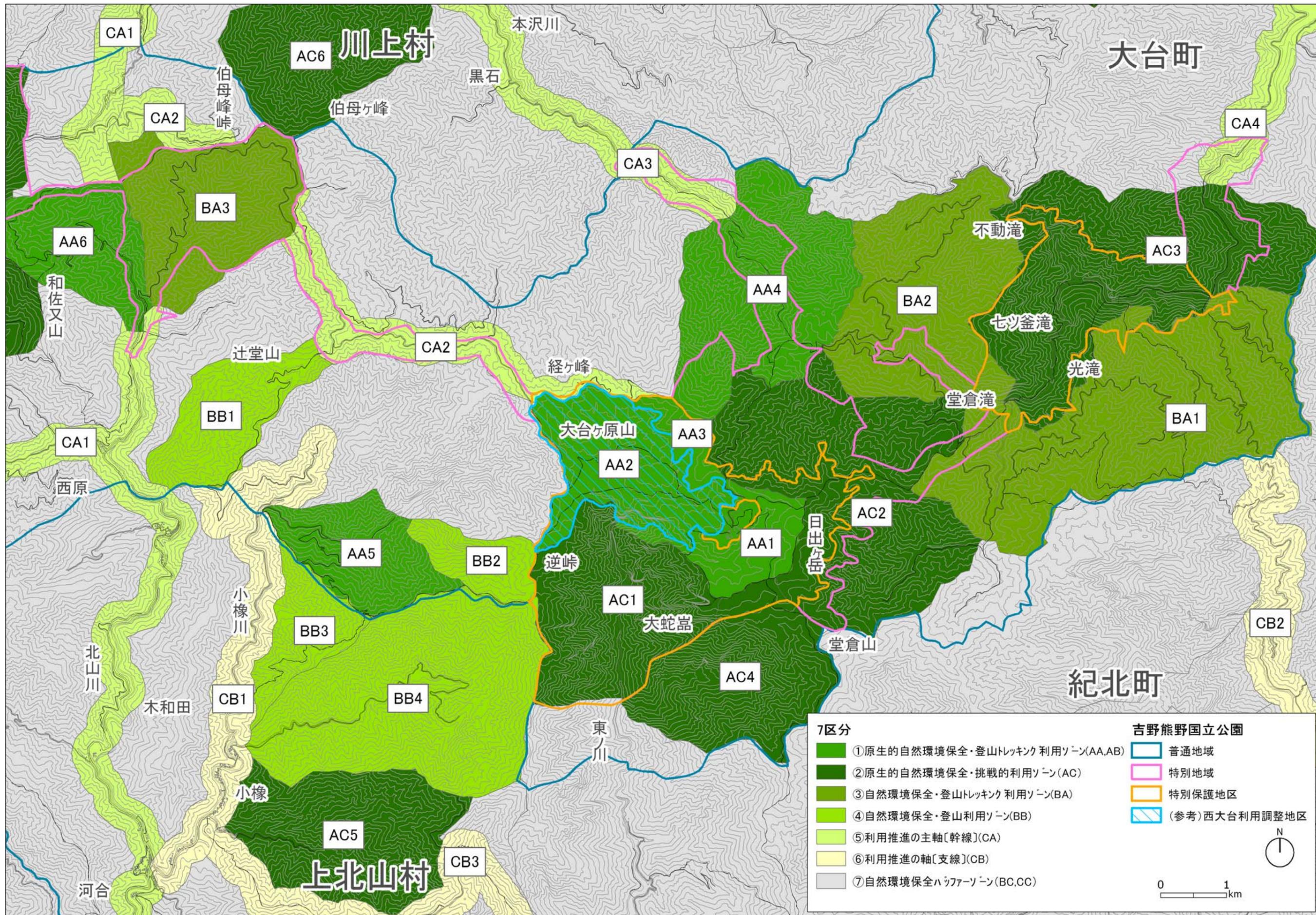


図 3-34 : 利用ゾーニング (案) と自然公園の地種区分

